

■研究チーム⑧

資本主義とイギリスの近代

研究チームの研究課題名

資本主義とイギリスの近代—歴史、思想、文化の変容について

研究代表者およびチームリーダー

道重 一郎（国際経済学科・教授）

研究分担者名

研究員

近藤 裕子（経済学部経済学科・教授）

太子堂 正称（経済学部経済学科・准教授）

川野 祐司（経済学部国際経済学科・准教授）

近藤 康裕（経済学部国際経済学科・講師）

研究計画の概要

イギリスの社会、文化、思想の変遷をたどり、これらと経済構造の変化との関連性について、検討を行うことが本研究の目的である。

イギリスは世界に先駆けていち早く産業革命を成し遂げ、近代資本主義発展の中心となった。19世紀末以降は、帝国主義的政策を強力に推進することによってグローバルな資本主義の展開においても中心的な存在であり続けた。イギリスの経済は、第二次世界大戦後に大英帝国の終焉を経たのちもベヴァリッジ報告に代表される福祉国家の側面と、前世紀からつづくシティの金融利害に基づいた資本主義という二つの異なる側面をもち、アメリカという新たな帝国が支配する現代においてなお独自の存在としての意味を保ちつつけている。このように欧米社会にあって、資本主義的発展の中心に位置したイギリスの社会構造や経済的な展開を、思想、文化と関連させながら具体的に検討していきたい。

経済思想の面では、イギリスは18世紀後半から、アダム・スミス、デイヴィッド・ヒューム、デイヴィッド・リカード、ジョン・ラスキン、J・S・ミル、アルフレッド・マーシャル、J・M・ケインズなど、経済に関して重要な業績を残した著名な思想家を多数輩出してきた。アダム・スミスの道徳論やラスキン、ミルの著作をみてもわかるとおり、経済学は19世紀までは倫理学の一分野とみなされてきた。この思想の系譜からは経済と倫理という問題系が導かれる。この問題系と系譜の研究は、自由主義とレッセ・フェールの思想とその批判、ニューレフト運動、サッチャリズム以降の新自由主義政策とそれへの批判など経済思想の変遷を考察する上で不可欠である。

また文化的な面では、初期近代イギリス文化におけるグランド・ツアーに代表されるツーリズムと

いった事象の研究を通じて、単なる文化交渉にとどまらない大陸ヨーロッパとの関係のなかから生まれたイギリスのアイデンティティ確立についての考察を深めることが企図される。同時に帝国主義の時代を経て、トランス・ナショナルな国境を越えた資本の移動という側面をもつグローバル資本主義が形成されていくなかで、どのような形の文化交流が展開したかについても考察していきたい。またこうしたヨーロッパ大陸とイギリスとの特異な関係についての考察は、20 世紀後半のヨーロッパ連合の動きに対するイギリスの政治的反応の紆余曲折、ユーロとポンドとの関係といった経済的、政治的問題に新たな光を当てるものでもある。

このように、本研究は、経済学、歴史学、文学、思想史などの特定分野にとどまらず、学際的な研究を融合することによって、現代のイギリス社会の源流を探るとともに、グローバル化の中で変容するイギリス社会の特徴を多角的に明らかにすることをめざす。

当該年度の研究活動

- 第1回 4月22日(木) 2010年度実施計画と内容について
場所 東洋大学白山校舎 2号館講師控室
- 第2回 7月28日(水)～29日(木) 研究会メンバーによる研究内容の報告会
場所 東洋大学熱海保養所
- 第3回 9月11日(土) ローズマリ・スウィート教授(英国レスター大学) セミナー
“Enlightenment and the ‘provincial genius’ of eighteenth-century Britain”
場所 東洋大学白山校舎 6号館6214教室
- 第4回 10月15日(金) 18日(月) 21日(木)
プロジェクト申請に伴う研究計画会議
場所 東洋大学2号館 近藤(裕)研究室
- 第5回 2月21日(月) まとめと今後の活動計画
場所 小金井市貫井南町 道重私邸